

小払沢遺跡

平成11年度 県営担い手育成基盤整備事業
深山地区に先立つ緊急発掘調査報告書

長野県原村教育委員会

表紙地図10,000分の1 ○印が小沢遺跡

序

このたび平成11年度に実施した小沢遺跡発掘調査報告書を刊行することになりました。

発掘調査は、県営担い手育成基盤整備事業深山地区に先立つて、諏訪地方事務所の委託と、国庫および県費から補助金交付を受けた原村教育委員会が実施したものであります。

小沢遺跡は注意されることのなかった遺跡であり、性格等はわかつていませんでした。今回の調査で、縄文時代中期の住居址と陥し穴が発見され、小規模な狩猟場であることが明らかになりました。縄文時代における狩猟活動を研究する上において、貴重な資料を提示することができたものと思っています。

このたびの発掘調査にあたり、諏訪地方事務所土地改良課の方々のご配慮、長野県教育委員会のご指導、長野県埋蔵文化財センターをはじめ発掘にかかわる多くの皆様のご協力に深甚なる謝意を表する次第であります。

発掘現場では、長野県埋蔵文化財センター 調査研究員 櫻井秀雄氏の多大のご助力と作業員の皆様のご苦労により、失われていく貴重な資料を記録に残すことができました。また、発掘調査報告書刊行にいたる過程で、お世話をいただいた皆様にたいし厚くお礼申し上げます。

平成12年3月

原村教育委員会

教育長 大館 宏

例　　言

- 1 本報告は「平成11年度県営担い手育成基盤整備事業深山地区」に先立って実施した、長野県諏訪郡原村払沢に所在する小払沢遺跡の緊急発掘調査報告書である。
- 2 発掘調査は、諏訪地方事務所の委託と、国庫および県費から発掘調査費補助金交付をうけた原村教育委員会が、平成11年8月11日から12年1月14日にかけて実施した。整理作業は、平成12年1月16日から3月24日まで行った。
- 3 現場における記録と写真撮影は平出一治・櫻井秀雄が行い、遺構の実測は株式会社写真測図研究所に委託した。
- 4 執筆は、平出と櫻井が話し合いのもとに行った。
- 5 本調査の出土遺物、記録等はすべて原村教育委員会で保管している。
なお、本調査関係の資料には、36の原村遺跡番号を表記した。
発掘調査から報告書作成にわたって、原明芳・武藤雄六の諸氏に御指導・御助言をいただいた。厚く御礼申し上げる次第である。

目　　次

| | |
|---------------|------|
| 序　　例　　言 | 目　　次 |
| I 発掘調査の経過 | 1 |
| 1 発掘調査に至る経過 | |
| 2 調査組織 | |
| 3 発掘調査の経過 | |
| II 調査方法 | 3 |
| 1 位置と環境 | |
| 2 調査方法と土層 | |
| III 発見した遺構と遺物 | 6 |
| 1 住居址 | |
| 2 小竪穴 | |
| 3 遺構外出土の遺物 | |
| IV まとめ | 16 |
| 写真図版 | |
| 報告書抄録 | |

I 発掘調査の経過

1 発掘調査に至る経過

平成6年度から実施されてきた「県営担い手育成基盤整備事業深山地区」も6年目をむかえ、小沢遺跡の保護については、平成10年10月27日と同11年1月27日に行われた「平成11年度県営担い手育成基盤整備事業深山地区にかかる埋蔵文化財保護協議」で協議された。

遺跡は現状のまま保存していくのが最も望ましいことであるが、原村の農業の将来を考えると農地の整備は必要なことである上に、農業者から強い要望があり「記録保存やむなき」との考えに落ち着き、平成11年度に緊急発掘調査を実施し、記録保存をはかる方向で同意をみることができた。出席者は長野県教育委員会文化財・生涯学習課、諏訪地方事務所土地改良課、原村役場農林課、原村教育委員会の4者である。

その後も協議を重ね調査日程等の確認を行い、原村教育委員会は、国庫および県費から発掘調査補助金交付をうけ、また、諏訪地方事務所から緊急発掘調査の委託をうけ、平成11年8月11日から同12年1月14日にわたって緊急発掘調査を実施した。

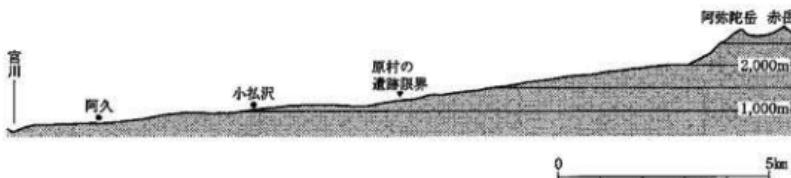
2 調査組織

小沢遺跡発掘調査団名簿

団長 大館 宏（原村教育委員会教育長）

調査担当者 平出 一治

調査員 櫻井 秀雄



第1図 原村域の地形断面模式図（宮川一小沢遺跡一赤岳ライン）

| | | | | | |
|-------|------|-------|-------|-------|-------|
| 調査参加者 | 発掘作業 | 池 冬樹 | 吉川 幸子 | 久根 種則 | 小島久美子 |
| | | 小島 政雄 | 小林 りえ | 小松 弘 | 五味 元 |
| | | 五味八代江 | 清水 太助 | 清水 正進 | 進藤 郁代 |
| | | 田中 初一 | 津金喜美子 | 西沢 寛人 | 日達今朝江 |
| | | 横内かおり | | | |
| 整理作業 | | 池 冬樹 | 吉川 幸子 | 久根 種則 | 小島久美子 |
| | | 小島 政雄 | 小林 りえ | 小松 弘 | 清水 太助 |
| | | 清水 正進 | 進藤 郁代 | 田中 初一 | 津金喜美子 |
| | | 西沢 寛人 | 日達今朝江 | 横内かおり | |

事務局 原村教育委員会 小林 銳見（教育次長） 津金 一臣（庶務係長）
 戸田 美鈴 平出 一治（文化財係長） 中村 恵子
 櫻井 秀雄（県派遣主事）

3 発掘調査の経過（調査日誌抄）

- 平成11年8月11日 発掘準備をはじめる。
- 30日 調査トレンチの設定を行い、重機によるトレンチの掘削をはじめる。
- 9月3日 繩文土器の発見と小豎穴の埋没を確認する。
- 4日 小豎穴を確認した地点の表土剥ぎをはじめる。
- 8日 重機によるトレンチ掘りと表土剥ぎは終了する。他遺跡の調査の都合上、当分の間調査を中断する。
- 10月25日 工事範囲の変更に伴う協議を現地で行う。
- 29日 対象地区内に存在した墓地移転に立ち会う。墓穴および墓石の建立による破壊は著しく、遺構を確認することはできなかった。
- 12月7日 調査範囲の変更に伴い重機による表土剥ぎ、人力による遺構検出作業をはじめる。住居址の埋没を確認する。
- 8日 引き続き遺構の検出作業を行い、住居址と小豎穴の精査をはじめる。重機での表土剥ぎは終了する。
- 12年1月11日 小豎穴の精査を行う。
- 13日 引き続き小豎穴の精査、実測・記録等を行う。
- 14日 機材の撤去を行い、調査は終了する。

II 調査方法

1 位置と環境

小沢遺跡（原村遺跡番号36）は、長野県諏訪郡原村沢区の南方に位置する。

この辺りは八ヶ岳西麓のほぼ中央に位置し、当地方に特有な東西に細長く発達した大小様々な尾根がみられる。それらの尾根上には、縄文時代中期と平安時代後期を中心とした数多い遺跡が埋蔵されている。第2図と表1に付近一帯の遺跡を示したが、八ヶ岳西南麓の中では遺跡の希薄地域である。

本遺跡は、八ヶ岳から流下する矢の口川の右岸に発達する東西に細長い尾根上から南斜面に立地している。標高は1,065m前後を測り、地目は水田と普通畠である。南斜面の畠地には数多い疊が散乱し地味は良くない。



第2図 小沢遺跡の位置と周辺の遺跡

表1 小松沢遺跡と付近の遺跡一覧

○は遺物発見 ○は住居址発見

| 番号 | 遺跡名 | 旧石器 | 縄文 | | | | 弥生 | 古墳 | 奈良 | 平安 | 中世 | 近世 | 備考 |
|----|-------|-----|----|---|---|---|----|----|----|----|----|----|------------------------------------|
| | | | 草 | 早 | 前 | 後 | | | | | | | |
| 27 | 間瀬沢 | | | | ○ | | | | | ○ | ○ | | 昭和62・平成9年度発掘調査 |
| 28 | 宮平 | | | | | | | | | ○ | ○ | | 村史跡 |
| 29 | 向尾根 | | | | ○ | ○ | | | | ○ | | | 昭和50・54年度発掘調査 |
| 30 | 南尾根 | | | | ○ | | | | | ○ | | | |
| 31 | 中尾根 | | | | | | | | | ○ | | | |
| 32 | 大横道上 | | | | ○ | ○ | | | | ○ | | | 昭和42・51年度発掘調査 |
| 33 | ワナバ | | | | ○ | | | | | | | | |
| 34 | 橋の木 | | | | ○ | ○ | | | | | | | 村史跡 昭和33・35・36・45・57・平成3・7・8年度発掘調査 |
| 35 | 臥竜 | | | | ○ | ○ | | | | | | | |
| 36 | 小松沢 | | | ○ | ○ | | | | | | | | 平成11年度発掘調査 |
| 37 | 沢尾根 | | | | ○ | | | | | | | | 開田消滅 |
| 52 | 水掛平 | | | | ○ | ○ | | | | ○ | ○ | | 平成7・8年度発掘調査 |
| 54 | 宮ノ下 | | | ○ | ○ | | | | | ○ | ○ | | 昭和57・58年度発掘調査 |
| 55 | 中尾根 | | | ○ | ○ | ○ | | | | ○ | ○ | | 平成6年度発掘調査 |
| 56 | 家前尾根 | | | ○ | ○ | | | | | ○ | ○ | | 平成6年度発掘調査 |
| 57 | 久保地尾根 | | | | ○ | | | | | | | | 昭和5・平成6・7・8年度発掘調査 |
| 58 | 判之木 | | | | ○ | | | | | ○ | | | |
| 61 | 番飼場 | | | | ○ | | | | | ○ | ○ | | 昭和50年消滅 |
| 62 | 庚申 | | | | ○ | | | | | | | | |
| 63 | 裏の尾根 | | | | ○ | | | | | | | | |
| 64 | 古屋敷 | | | | ○ | | | | | | | | |
| 65 | 梨の木沢 | | | ○ | ○ | ○ | ○ | | | ○ | | ○ | 平成元年度発掘調査 消滅 |
| 75 | 山の神上 | | | | ○ | ○ | | | | | | | 昭和45・57・平成8年度発掘調査 |
| 79 | 中御射山東 | | | | | ○ | | | | | | | 昭和59年度発掘調査 消滅 |
| 80 | 御射山沢 | | | | | ○ | ○ | | | | | | 昭和59年度発掘調査 |
| 81 | 堤の尾根 | | | ○ | ○ | ○ | ○ | | | ○ | | | 平成2年度発掘調査 消滅 |
| 85 | 箕手久保 | | | | | ○ | ○ | | | | ○ | | 昭和61年度発掘調査 消滅 |
| 86 | 判の木尾根 | | | | | ○ | | | | ○ | | | 昭和62年度発掘調査 |
| 89 | 梨の木沢西 | | | | | | | | | | | | 平成元年度発掘調査 消滅 |
| 90 | 中道通 | | | | | ○ | | | | | | | 平成元年度発掘調査 消滅 |
| 91 | 古屋敷西 | | | | | | ○ | | | | | | 平成2年度発掘調査 消滅 |
| 92 | 御射山道北 | | | | | | ○ | ○ | | | | | 平成2年度発掘調査 消滅 |
| 99 | 中尾根原 | | | | | ○ | | | | ○ | | | 平成10年度発掘調査 |

調査着手前、尾根上の平坦部は広くみえていたが、トレンチ調査の結果、尾根上の平坦部はすでに地山のローム層までが削平されたものであり、北の浅い沢状地形は埋められていた。したがって以前は、馬の背状のやせた尾根であったものと思われる。矢の口川との比高差は12m程を測り、南斜面の傾斜は極めて強く、土の流失が著しかったようで黒色土の堆積は薄い。尾根上の削平部分と南斜面の耕作土はロームを粉碎したものである。また、墓地による破壊もみられ遺跡の保存状態は極めて悪いものであった。

本遺跡が発見されたのはそう古いことではなく、『原村誌 上巻』に次のように記載されている。全文を引用しておきたい。

(36) 小沢遺跡（沢）

沢区の南方に位置する遺跡で、昭和54年度分布調査で縄文時代中期の曾利式土器破片を僅かに採集している。黒色土は極めて浅く、そのほとんどがロームを粉碎して耕作している状態であったため、地表からの観察だけでも円形に黒く変色した竪穴と考えられる落込み1ヵ所が確認できた。遺物の散布範囲は広くないようである。

2 調査方法と土層

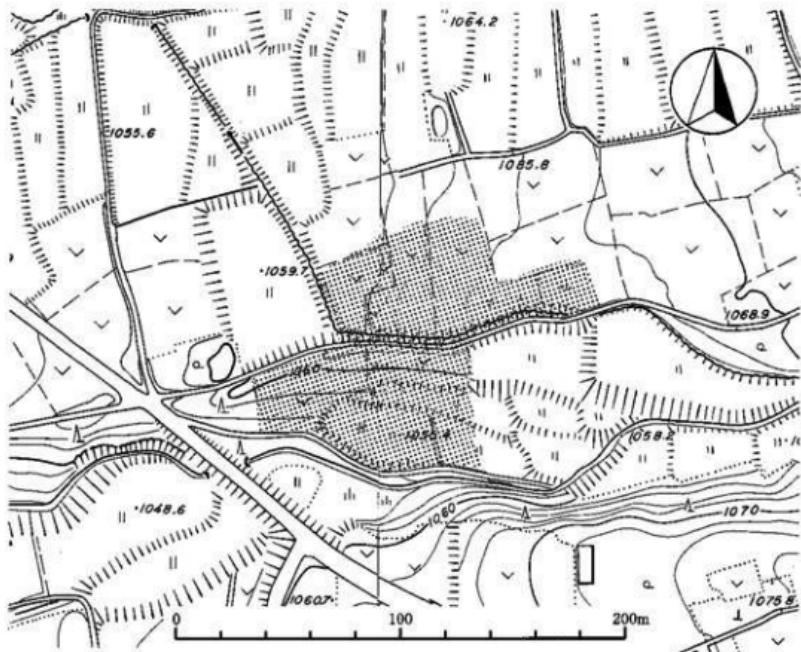
発掘調査は第3図に示したように、平成11年度県営担い手育成基盤整備事業深山地区にかかる範囲がその対象であった。遺跡の範囲が不明瞭なこともあります、平面直角座標系（国家座標）第Ⅳ系に合わせた小沢遺跡基準杭J-1の値、X=-4960、Y=-23950を基準とし、Y軸に合わせたトレンチを設定した。

トレンチの掘削は重機で行い、トレンチの幅は重機のバケット幅である1.2mである。トレンチの間隔は、当地方における縄文時代および平安時代の住居址の平均的規模より狭い5mとした。したがってトレンチ間は3.8m（5m-1.2m）である。引き続き人力でトレンチ内の精査を行い、土層の観察、遺物および遺構の埋没状況を確認するなかで遺跡の範囲を明らかにした。当地方における遺跡立地を考慮したものである。範囲を確認した時点で表土剥ぎに切り替え、人力で遺構の検出を行った。基本的にはローム直上を遺構検出面とした。

発掘調査は原則としてローム層の上面まで行い、小竪穴の調査は、平面で二分割しその半分を掘り下げ、土層の観察と記録を行い、その後残り半分の精査を行った。遺物の取り上げは、トレンチ調査ではトレンチ別、遺構に伴うものは遺構別に行った。

遺構の実測は株式会社写真測図研究所に委託し、トレンチの位置測量等は国家座標に従った測量基準杭を打設して行った。

ちなみに調査面積は1,424m²である。



第3図 発掘調査区域図・地形図（1:2,500）

調査対象地の土地利用状況は普通畠・水田・農道・墓地であるが、馬の背状のやせ尾根のため、広範囲にわたって削平と盛土が行われており、その攪乱は著しく最悪の状態であった。また、南斜面は傾斜が強く、土の流失は著しかったようで黒色土の堆積は薄かった。

小豊穴と住居址を検出した尾根上から南斜面の土層は次の通りである。

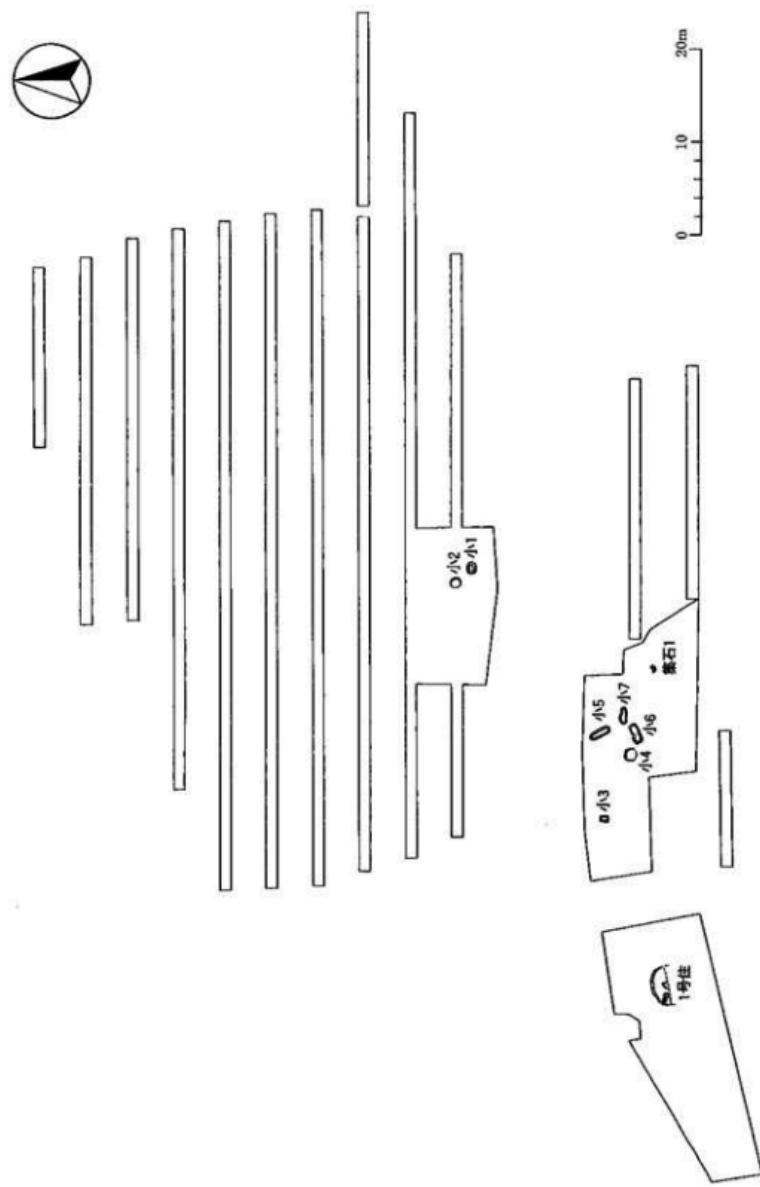
第Ⅰ層 黄褐色土 表土・畠の耕作土。ロームを粉碎したもので10~15cmの耕作土。場所によっては黒色土が混じる。

第Ⅱ層 ローム層 尾根上はすでに削平された硬いローム層である。斜面でもロームはみられたが疊の包含が広範囲で認められた。

III 発見した遺構と遺物

調査の結果、第4図に示したように縄文時代中期の豊穴住居址1軒、時期不詳の小豊穴7基を発見した。尾根上と南斜面の普通畠からであるが、前記したようにローム層におよ

第4圖 小弘升礦區產能配置圖



ぶ削平、また、耕作土が薄いために生じた耕作による擾乱が著しく最悪の状態であった。

南斜面で検出した小竪穴の東寄りは、沢状の地形で黒色土の堆積が厚くなる。黒色土中から土器破片の出土はみられたが、遺構を検出するまでには至らなかった。発見した土器破片はそれほど多くないが、尾根上から廃棄された可能性が高いものであり、ローム層におよぶ削平時にすでに遺跡の多くは破壊されたように思われる。

なお、遺構の記述でカッコ付けの数値は、欠損する遺構の現存部分を示したものである。

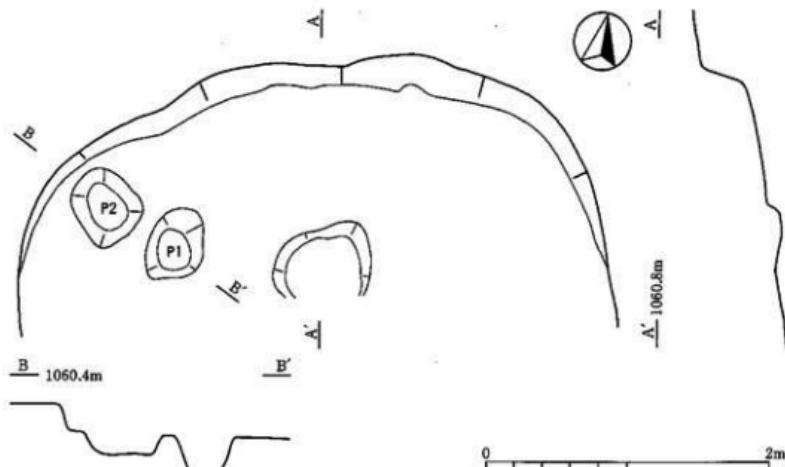
1 住居址

第1号竪穴住居址（第4・5・7図、写真2）

傾斜の強い南斜面で検出した。ローム層にローム粒が混じる褐色土の落ち込みを認めたが、南側の半分位はすでに流失していた。また、この辺りはロームを粉碎し耕作土にしており、擾乱は著しく不明瞭な点が多い。遺物の出土は少なく、住居址と認定したが確信がもてるものではない。

埋土は、ローム粒が混じる褐色土で、下層ほどローム粒は多く、北側（尾根上方向）から流れ込んだ状況が観察できた自然埋没である。

平面形は、残存した壁が少なく詳しいことはわからないが、北壁の弧が緩やかであることからみて、この時期にしばしばみられる隅丸方形に近いものであったように思われる。大きさは、東西423cm、南北（170）cmである。



第5図 第1号住居址実測図

壁は、ロームで立ち上がりは普通であるが、崩落がみられる上に耕作による搅乱が著しい。壁高は、北壁で30cmを計る。東壁と西壁はわずかな範囲が残るだけであり、それも南に寄るほど低くなる。

床面は、ロームで北壁際にやや硬い箇所も見られたが、総体的には軟弱であり、自然傾斜の方向に傾き流失した範囲は広いようである。

柱穴は、北壁西寄りのP1がその位置にあたるが浅いものである。P2はより浅く性格は不明である。P1・P2以外にピットの検出はなく、配列は不規則なものであり不明な点の方が多い。

周溝は、検出できなかった。

炉址は、住居ほぼ中央で焼土の弱い方形の炉穴を検出したが、該期の炉は方形切炬縫状石囲炉であることが多いため、ここでは石が抜き取られた炉址と考えておきたい。

遺物は少なく土器破片が4点出土しただけである。同個体の破片で第7図1の1点を図示した。縄文時代中期後葉の曾利Ⅲ期である。

2 小 竪 穴

小竪穴1（第4・6図、写真3・4）

尾根上で検出調査した。ロームに黒色土の落ち込みを認めたが、ロームが削平されていたため、検出面はハードロームであり極めて明瞭なものであった。

埋土は、検出時における平面観察で、すでに三角堆土と逆三角堆土がリング状に見える状態であった。外側の三角堆土はローム粒で壁土が落下したものであろう。内側の逆三角堆土はローム粒が多く混じる褐色土で、自然埋没と思われるものである。

平面形は、124×96cmの橢円形を呈し、底面は短軸方向に丸みがみられるが、壁の立ち上がりはやや緩やかで深さは90cmを計る。逆茂木に係る小ピットはないが、形態からみて陥し穴と思われるものである。伴出土器はなく帰属時期を決めるることはできないが、ここでは縄文時代と考えておきたい。

遺物の発見は皆無である。

小竪穴2（第4・6図、写真3・5）

小竪穴1の北西方の尾根上で検出した。ロームが削平されていたため、検出面はハードロームで落ち込みは極めて明瞭なものであった。ロームの削平は厚かったようであり、小竪穴の底部辺りがわずかに残存していただけである。

埋土は、ローム粒が混じる黒色土であるが下層ほどローム粒は多く、自然埋没によるも

のと思われる。その色調は当地方にみられる中世～近世の陥し穴のものに酷似していたが、平面形が異なるうえに、極めて特徴的な逆茂木を打ち込んだ小ピットが検出できないことから、ここでは縄文時代に帰属するものと考えておきたい。

平面形は、 104×104 cmの円形を呈し、底面は平らで北壁際に小ピットが2個穿たれているが、逆茂木に係る小ピットとは異なるようで性格は不明である。壁の立ち上がりは良いが、深い所でも12cmを計るだけである。

遺物の発見は皆無である。

小竪穴3（第4・6・7図、写真6）

南斜面で検出した。この斜面もやはり削平ないしは自然流失が著しかったようで、底部辺りが残存していただけである。

埋土は、検出時における平面観察で、すでに三角堆土と逆三角堆土がリング状に見える状態であった。外側の三角堆土はローム粒が多く混じる黄褐色土で壁土が落下したもので、内側の逆三角堆土はローム粒が混じる黒色土であり、自然埋没によるものと思われる。逆三角堆土の色調は、当地方でみられる中世～近世の陥し穴のものに酷似していたが、平面形と規模が異なり、極めて特徴的な逆茂木を打ち込んだ小ピットが検出できないことから、ここでは縄文時代に帰属するものと考えておきたい。

平面形は、 95×70 cmの不正長方形を呈しているが、掘りすぎた所もあり梢円形であったものと思われる。底面は平らで壁の立ち上がりは良く深さは21cmを計る。形態と埋土のありかたからみて陥し穴と思われる。

遺物は、第7図2の無文土器破片1点が出土した。遺物の出土は本址だけで埋没途上における混入も考えられる。この1点で帰属時期を決定することはできない。

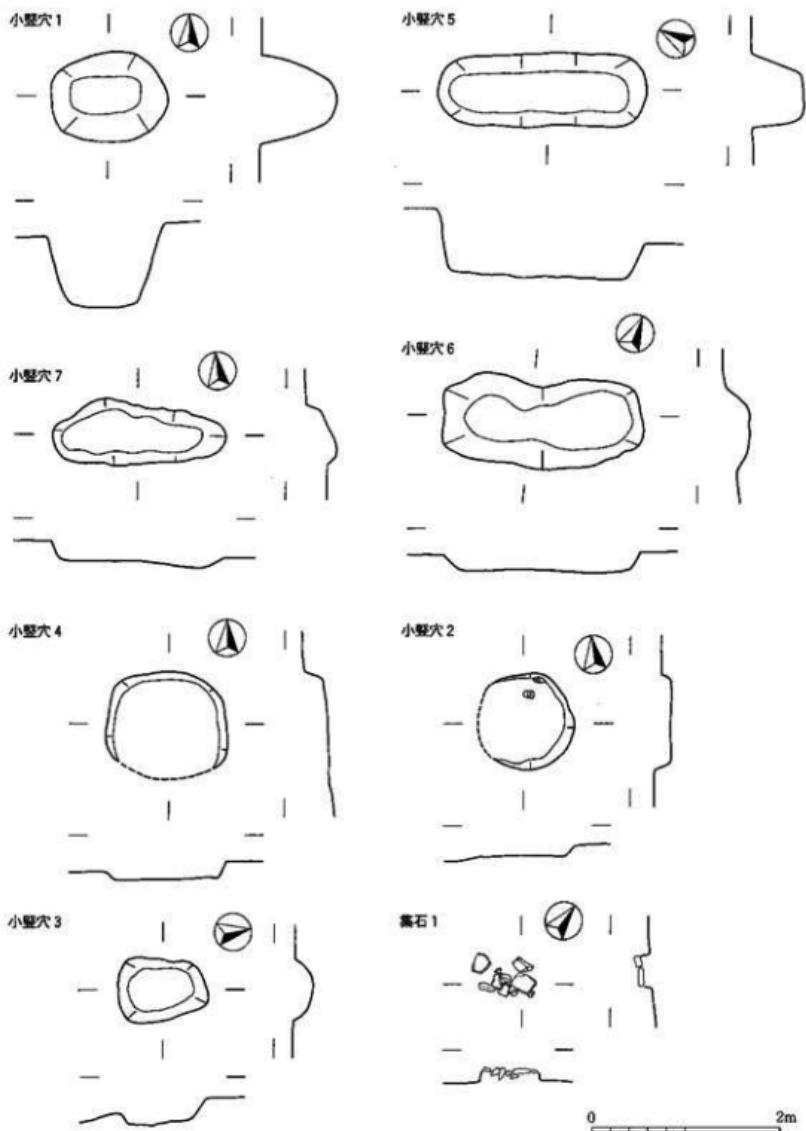
小竪穴4（第4・6図）

小竪穴3の東方の南斜面で検出したが、削平ないしは自然流失が著しかったようであり、底部辺りが残存していただけである。

埋土は、ローム粒が混じる褐色土で、下層ほどローム粒が多く自然埋没と思われるものである。

平面形は、 $130 \times (115)$ cmの円形を呈し、底面はほぼ平らであるが自然傾斜の南にやや傾く。壁の立ち上がりは比較的良好であるが、南壁はすでに流失していない。深さは残存した北壁で23cmを計る。

形態は小竪穴2と同様で埋土の色調に違いはみられたが、ここでは縄文時代の陥し穴と考えておきたい。



第6図 小窓穴実測図

遺物は、図示しなかったが小さな土器破片2点と黒曜石の剥片3点がある。

小豎穴5（第4・6図）

小豎穴4の北東方の南斜面で検出したが、削平ないしは自然流失が著しかったようであり、底部辺りが残存していただけである。

埋土は、検出時における平面観察で、すでに三角堆土と逆三角堆土がリング状に見える状態であるが、小豎穴1・3に比べるとやや不鮮明であった。外側の三角堆土はローム粒が多く混じる黄褐色土で壁土が落下したものであり、内側の逆三角堆土はローム粒が混じる黒色土で、自然埋没によるものと思われる。

平面形は、222×78cmの長楕円形を呈し、底面は平らで壁の立ち上がりは良く、深さは深い北壁で86cm、南壁は33cmを計る。

小豎穴1に比べ細長く中世～近世の陥し穴に近い形態であるが、極めて特徴的な逆茂木を打ち込んだ小ピットが検出できないことから、ここでは縄文時代の陥し穴と考えておきたい。

遺物の発見は皆無である。

小豎穴6（第4・6図）

小豎穴5の東方の南斜面で検出したが、削平ないしは自然流失が著しかったようであり、底部辺りが残存していただけである。

埋土は、検出時における平面観察で、やや不鮮明であったが三角堆土と逆三角堆土がリング状に見える状態で、外側の三角堆土はローム粒が多く混じる黄褐色土で壁土が落下したものであり、内側の逆三角堆土はローム粒が混じる黒色土で、自然埋没によるものと思われる。

平面形は、214×92cmの不整楕円形を呈しているが、地山のロームには数多い礫が含まれており、この礫による影響が大きいものと思われる。底面はほぼ平らで深さは26cmを計る。

やはり細長いもので中世～近世の陥し穴に近い形態であるが、極めて特徴的な逆茂木を打ち込んだ小ピットが検出できないことから、ここでは縄文時代の陥し穴と考えておきたい。

遺物の発見は皆無である。

小豎穴7（第4・6図）

小豎穴6の東方の南斜面で検出したが、削平ないしは自然流失が著しかったようであり、底部辺りが残存していただけである。

埋土は、耕作による攪乱が著しく詳しいことはわからないが、ローム粒が多く混じる褐色土で、自然埋没によるものと思われる。

平面形は、 $184 \times 72\text{cm}$ の不整橢円形を呈し、底面はほぼ平らで自然傾斜方向に傾いている。深さは 22cm を計るが全体に整っていない。

やはり細長いもので、中世～近世の陥し穴に近い形態であるが、極めて特徴的な逆茂木を打ち込んだ小ピットが検出できることから、ここでは縄文時代の陥し穴と考えておきたい。

遺物の発見は皆無である。

集石1（第4・6図）

黒色土中に掘り拳から人頭大の礫集中がみられた。上面はほぼ平らで人為的に据え置かれたものと考えたが、この1基だけの発見である上に伴出遺物はなく詳しいことは一切わからないものである。ここでは図示するにとどめておきたい。

3 遺構外出土の遺物

土器と石器がある。その多くは「調査方法と土層」でふれた南斜面の小豎穴東寄りの沢状地形からの出土である。縄文時代中期中葉期の土器が比較的まとまっており、トレンチ内および土層を詳細に観察したが、遺構の埋没を確認するまでには至らず遺構外出土遺物とした。

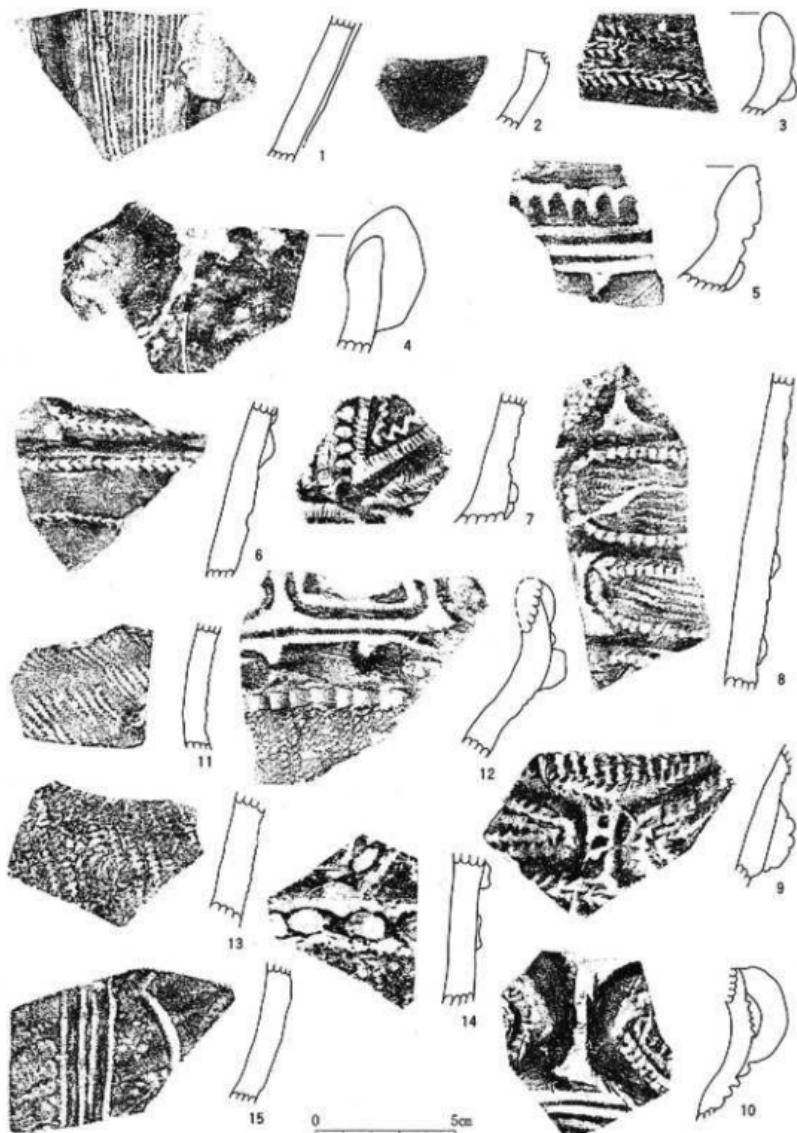
傾斜が強い所であり、上方の尾根上から廃棄されたことが考えられるが、尾根上はすでにローム層までが削平されており、肩部は尾根方向に走る沙と農道によりやはりローム層が削平された状態であった。したがって、尾根上でこれらの土器破片や石器を廃棄した人たちの痕跡を確認することはできないが、ローム削平の折にすでにその痕跡は破壊されたものと考え、遺物の出土状態から尾根上からの廃棄と考えておきたい。

土器（第7・8図）

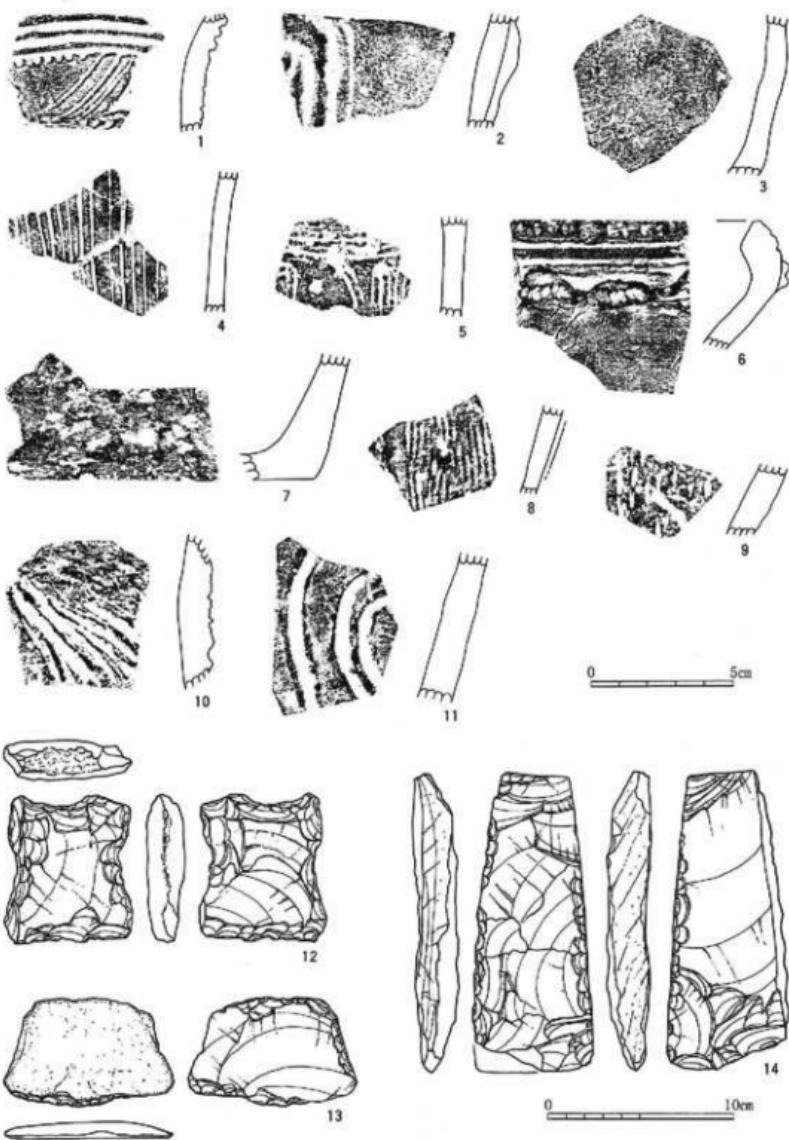
土器は、縄文時代早期と中期の破片がある。早期の山形押型文土器は小さな破片1点で図示できなかった。第7図3～10、第8図1～8は中期中葉の新道期で、第8図6は浅鉢である。第8図9～11は後葉の曾利期である。

石器（第8図）

石器は、第8図12・14の打製石斧2点、13の横刃形石器1点と黒曜石の剥片がある。12は破損した打製石斧に再加工を施したものであり、完形品と考えておきたい。



第7図 小沢遺跡出土土器拓影 (1. 2号住居址 2. 小堅穴 3 ~ 15. 造構外)



第8図 小松沢遺跡出土土器拓影・石器実測図

IV まとめ

当地方の縄文時代の遺跡としては、その立地条件は良くない馬の背状のやせ尾根である。縄文時代中期後葉の曾利Ⅲ期の住居址1軒と、伴出土器がなく帰属時期を明確にすることのできない小竪穴7基を発見した。

しかし、尾根上はローム層までが削平され、また、尾根筋方向に走る汐と農道で削平破壊された範囲は広く、遺跡の全体像を把握することはできなかったようである。本調査で検出した小竪穴の配置状況からみていくと、削平された汐と農道部分に小竪穴が構築されていたことは容易に考えられることである。

発見した住居址は、「原村誌 上巻」に「黒色土は極めて浅く、そのほとんどがロームを粉碎して耕作している状態であったため、地表からの観察だけでも円形に黒く変色した竪穴と考えられる落込み1ヶ所が確認できた。」との記載がみえるが、昭和54年度に実施された「八ヶ岳西南麓遺跡群分布調査」に、たまたま携わっていたこともあり、当時の記録をみるとその位置は一致しているようである。また、曾利式土器を採集しているが、本址は曾利Ⅲ期に帰属するもので、原村誌に記載された竪穴にほぼ間違いないようである。

小竪穴は7基発見したが、平面形態から円形と梢円形に大別できるが、両者とも陥し穴と考えられるものである。確実な伴出土器がないため明確な帰属時期を示すことはできないが、埋土の状態からみると少なくとも2時期に分けることができそうである。

陥し穴は、やせ尾根の尾根上から南斜面の極めて狭い範囲に群集していることは明らかであり、狩猟場であった可能性は高く、その場（範囲）が極めて狭い点を一つの特徴としてあげることができよう。狭い狩猟場は獣道と深い係りの中で選定されたものであろうが、対象とした動物については不明である。

村内では、柏木の臼ヶ原遺跡と南平遺跡、中新田の芝原尾根遺跡で数多い陥し穴を調査している。それらは大規模な狩猟場であり特徴を有するものであるが、新たに小規模な狩猟場を報告できたことは、当地方における狩猟活動の研究に役立つものと思っている。

最後に、関係者各位ならびに発掘調査に携わった方々に厚くお礼申し上げる次第である。

写真1
遺跡遠景
西から



写真2
第1号竪穴住居址
南から

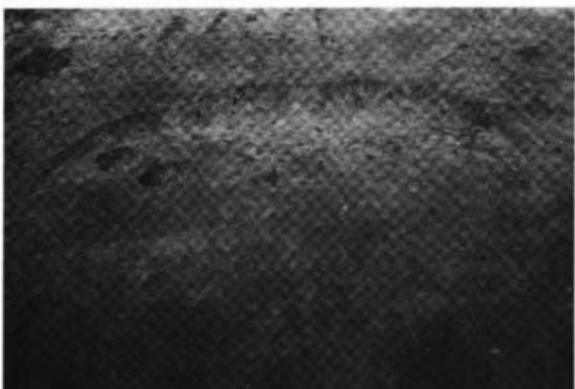


写真3
小竪穴1・2検出状態
奥 小竪穴1
手前 小竪穴2
西から

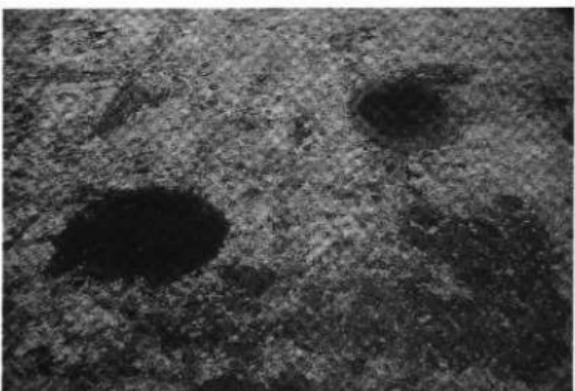


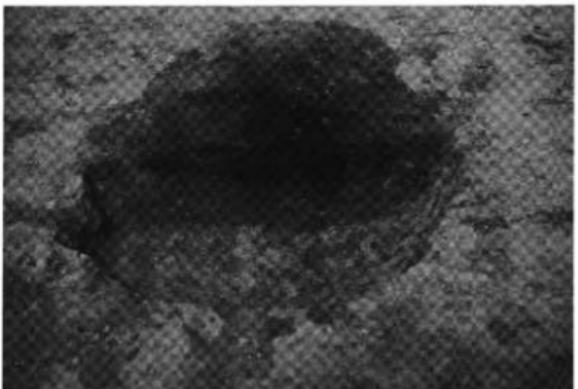
写真4
小堅穴 1



写真5
小堅穴 2



写真6
小堅穴 3
土層



報告書抄録

| ふりがな | こはらいざわいせき | | | | | | |
|--------|--|--------------------|--------------------------|--------------------|-----------------------|---|---|
| 書名 | 小沢遺跡 | | | | | | |
| 副書名 | 平成11年度 県営担い手育成基盤整備事業深山地区に先立つ緊急発掘調査報告書 | | | | | | |
| 卷次 | | | | | | | |
| シリーズ名 | 原村の埋蔵文化財 | | | | | | |
| シリーズ番号 | 54 | | | | | | |
| 編著者名 | 平出一治 横井秀雄 | | | | | | |
| 編集機関 | 原村教育委員会 | | | | | | |
| 所在地 | 〒391-0192 長野県諏訪郡原村6549番地1 TEL 0266-79-7930 | | | | | | |
| 発行年月日 | 西暦 2000年03月 | | | | | | |
| 所収遺跡 | 所在地 | コード 市町村 遺跡番号 | 北緯 度分 度秒 | 東經 度分 度秒 | 調査期間 | 調査面積 m ² | 調査原因 |
| 小沢 | 長野県諏訪郡 原村中新田 | 3637 | 36 57分 16秒 | 138度 14分 00秒 | 19990811 20000114 | 1,424 | 平成11年度 県営担い手 育成基盤整 備事業深山 地区 |
| 所収遺跡名 | 種別 | 主な時代 | 主な遺構 | 主な遺物 | 特記事項 | | |
| 小沢 | 集落跡 | 縄文時代 | 中期 竪穴住居址 小窓穴 集石 | 1軒 7基 1基 | 縄文時代 中期土器破片、 石器 | 小型穴は陥れ穴と思われるが、やせ尾根の尾根上から南斜面の浙めて狭い範囲で発見した。狩猟場であった可能性が高いが、その場が極めて狭いことが特徴のようである。 | |

原村の埋蔵文化財54

小 払 沢 遺 跡

平成11年度 県営担い手育成基盤整備事業
深山地区に先立つ緊急発掘調査報告書

発行日 平成12年3月

発 行 原村教育委員会

印 刷 もえぎ企画書籍

